

心理研究部門

室伏靖子・浅野俊夫
小嶋祥三・松沢哲郎

研究概要

1) チンパンジーの人工語の習得¹⁾

室伏靖子・浅野俊夫・小嶋祥三・
松沢哲郎・小島哲也²⁾

図形語による物体名・色名に加えて、さらに数の命名訓練がおこなわれ、それらの関係について高次の概念形成の観点から分析された。

2) チンパンジーのトークン使用と食物の好みの分析

室伏靖子・浅野俊夫・小嶋祥三

自動販売機にコインを入れて自由に食物を選択することを訓練した結果、食物の選択に一定の好みが見られ、食物を得るために必要なコインの数を変えると、この好みの傾向はさらに明瞭になった。

3) ニホンザル乳幼児の認知の発達

室伏靖子・松沢哲郎

出生直後から約3年間、知覚・認知機能の発達過程が、身体・運動・生理的な発達と関連させて観察された。とくに対象の永続性といった問題をとりあげるとともに、行動観察の技法として心拍テレメトリーを併用したビデオ録画システムを開発した。

4) 刺激制御にみられる大脳両半球の非対称性

室伏靖子・南雲純治³⁾

サルの平静な表情から威嚇の表情に変化する系列刺激(10枚の白黒スライド)をもちいて、切断脳のアカゲザルの反応の範疇化が、左右半球で相違するか否かをしらべた。

5) ニホンザルの集団場面におけるオペラント行動の獲得と伝播

浅野俊夫

本研究所内の放飼場の内部に、パネルを押すと大豆等の食物が提示される自動給餌装置を設置し、この新しい食物入手方法が群れの中に定着する過程を観察し、習得過程やその後の維持反応と社会的順位などとの関係を分析している。またニホンザルの群れでよく見られる「土食い」行動の心理学的研究にも着手した。

6) オペラント強化の性質に関する実験的研究

浅野俊夫

主としてニホンザルの摂食行動をとりあげ、摂食スケジュールがオペラント行動の強化にどのように関与するのかを、近年のエコロジー的視点と環境適応における行動の配分(行動経済)という観点から分析することに着手した。

7) 音の弁別と記憶に関する研究

小嶋祥三

チンパンジーとニホンザルで反応時間課題をもちいて純音・ヒトの合成音声の弁別の研究をおこなった。lateralityの問題と結びつけようとしている。ニホンザルでGo/NoGo式遅延見本合わせ、遅延条件性位置弁別課題をもちいて、様々な音の記憶とそれに影響をもつ要因について検討した。

8) 霊長類の視知覚機能の心理物理学的測定

松沢哲郎

チンパンジー、ニホンザルの色知覚等の視知覚機能をその行動を通じて解析する。人工言語による言語反応、見本合わせ、感覚性強化による評価法等による検討をすすめている。

9) 食物嫌悪条件づけによる野生ニホンザルの食性の統制⁴⁾

松沢哲郎

飼育下ニホンザルを対象として、催吐剤をもちいた嫌悪条件づけにより、特定食物に対する嫌悪を人為的に形成できることがわかった。野生個体群に適用するために必要な手段ならびに効果判定の方法を検討している。

総説

1) 浅野俊夫(1982): 行動の形成。“現代基礎心

1) 久保田競(神経生理部門), 長尾真(京大工学部), 神尾昭雄(筑波大現代語現代文化学系)との共同研究

2) 学振奨励研究員

3) 文部技官

4) 長谷川芳典(京大文学部), 東滋(社会部門), 和田一雄(変異部門), 後藤俊二(サル施設), 川村俊蔵(社会部門)との共同研究

理学第5巻 学習I”(佐々木編), pp. 91 - 114, 東大出版会, 東京。

- 2) 浅野俊夫 (1982): 類人猿の人工言語獲得。“言語の獲得”, (日本行動分析研究会編)。
- 3) 松沢哲郎 (1982): 知的機能の系統発生。“きこえとことば” モノグラフNo 5, (基礎講座きこえとことば実行委員会編)。
- 4) 松沢哲郎 (1981): 感覚性強化-強化刺激の多様性一。心理学評論, 24(3), 220 - 251。

論文

- 1) Asano, T., Kojima, T., Matsuzawa, T., Kubota, K. & Morufushi, K. (1982): Object and color naming in chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Proc. Japan Acad.*, 58B (5), 118-122.
- 2) Kojima, S. & Goldman-Rakic, P. S. (1982): Delay-related activity of prefrontal neurons in rhesus monkeys performing delayed-response. *Brain Res.*, 248, 43-49.
- 3) Kojima, S., Kojima, M. & Goldman-Rakic, P. S. (1982): Operant behavioral analysis of memory loss in monkeys with prefrontal lesions. *Brain Res.*, 248, 51-59.
- 4) 藤田和生 (1981): 異種見本合わせ課題によるニホンザルの概念学習の実験的分析。心理学研究, 52, 92-98。

報告・その他

- 1) 松沢哲郎・室伏靖子 (1982): ニホンザル乳児の行動発達。科学研究費補助金一般研究A「選択行動における反応トポグラフィと反応階層性」研究成果報告書, Pp. 9 - 19。
- 2) 松沢哲郎・田中昌人 (1981): サルとヒトの話, クリニシアン, 28, (5・6), 30-37。
- 3) 小嶋祥三 (1981): 岩本氏の論文を読んで。心理学評論, 24(3), 306 - 307。

学会発表

- 1) チンパンジーによるトークン使用の習得
浅野俊夫・小嶋祥三・室伏靖子
日本動物心理学会第41回大会 (1981)
動物心理学年報, 第31輯, (1), 50。
- 2) ニホンザル野外群におけるオペラント行動の獲得(1)
山本淳一・樋口義治・浅野俊夫

日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 262。

- 3) ニホンザル野外群におけるオペラント行動の獲得(2)
樋口義治・山本淳一・浅野俊夫
日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 263。
- 4) チンパンジーにおける人工語の受容一言語反応を要求する場合一
浅野俊夫・小嶋哲也・松沢哲郎
久保田競・室伏靖子
日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 355。
- 5) チンパンジーの位置系列の学習
小嶋祥三
日本動物心理学会第41回大会 (1981)
動物心理学年報, 第31輯, (1), 49。
- 6) アカゲザルの前頭前野ニューロン活動と遅延反応一遅延時間の変化一
小嶋祥三
日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 45。
- 7) チンパンジーの色知覚一人工語による色の命名一
松沢哲郎
日本動物心理学会第41回大会 (1981)
動物心理学年報, 第31輯, (1), 50。
- 8) ニホンザル幼児の色知覚一感覚性強化による評価一
松沢哲郎
日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 241。
- 9) ニホンザルの食物嫌悪条件づけ一食物の新奇性の効果一
長谷川芳典・松沢哲郎
日本動物心理学会第41回大会 (1981)
動物心理学年報, 第31輯, (1), 48-49。
- 10) ニホンザルの食物嫌悪条件づけ一ある状況に限定された摂食行動の抑制一
長谷川芳典・松沢哲郎
日本心理学会第45回大会 (1981)
発表論文集, 269。
- 11) 知能の系統発生一チンパンジーによる人工言語の習得一
松沢哲郎

社会研究部門

川村俊蔵・東 滋
鈴木 晃・小山直樹
森 梅代*¹⁾ 足澤貞成*²⁾

研究概要

1) ニホンザル地域個体群の研究——木曾

川村 俊 蔵

木曾研究林において、3個の大型群と1個の小型群の遊動ならびに群間関係に関する調査を行っている。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とクルーピング・社会構造

東 滋・足澤貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

3) ニホンザルの地域個体群の動態に関する研究

鈴木 晃

房総半島を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査を継続している。

4) 猿害の発生とその防止の研究

川村俊蔵・鈴木 晃

農業者にとっても、ニホンザルの保存についても、由々しい問題である猿害について、その発生機序を知り、防止対策を考え、人間とサルとの調和をはかるべく、長野県上松町および房総丘陵で資料の採集ならびに防止実験を行った。

5) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比

較と、同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域の調査を行った。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

6) ニホンザルの社会的発達に関する研究

森 梅 代

これまで主に幸島群を対象にコドモの社会的発達の研究を遊び、子守り行動などを通して行ってきたが、比較のデータを得るために、オープンエングロージャーでの観察を行った。今後両者の比較研究を社会的な場を考慮に入れながら進めていく予定である。

7) スマトラにおける霊長類研究

川 村 俊 蔵

年報第10巻に紹介した、スマトラ自然研究計画に関し、日本学術振興会の派遣により、1ヶ月スマトラに赴き、新設された研究室の譲渡式に参加し、日本側を代表し式辞を述べた資料の展示を行った。

8) 原猿類の社会生態学的研究

東 滋・小山直樹

マダガスカル島の前猿類についての現地調査を海外調査特別事業の1980、1981年度継続計画として行なった。北部で同所的に生息する *Lemur fulvus sanfordi* と *L. coronatus* の群間関係、種間関係、すみ分け、個体群構造、食物空間利用に関する比較社会生態学(東)、南部に生息する地上性の強い *L. catta* の社会行動について、同じような複雄複雌の群れを作るマカク類と比較するという観点から、調査を行った(小山)。

9) アフリカのチンパンジー、その他の霊長類の比較社会・生態学に関するまとめの研究

鈴木 晃

10) ホオジロマンガベイの社会生態学的研究

小 山 直 樹

ザイール共和国東部のイランギおよびチャボバでホオジロマンガベイの食性、遊動、音声などについて調査した。なお本調査は海外特別事業(1981年度)の一部をなすものである。

11) ドリルの生態学的研究

森 梅 代

1) 教務職員

2) 教務補佐員